

第  
582  
集

青森県埋蔵文化財調査報告書 第582集

館  
平  
遺  
跡  
Ⅲ

# 館平遺跡Ⅲ

— 県道差波新井田線交通安全施設整備事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

二  
〇  
一  
七  
・  
三

青  
森  
県  
教  
育  
委  
員  
会

2017年3月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第582集

# 館平遺跡Ⅲ

— 県道差波新井田線交通安全施設整備事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2017年3月

青森県教育委員会

## 序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成22年度から県道差波新井田線交通安全施設整備事業予定地内に所在する館平遺跡の発掘調査を実施し、既に2冊の調査報告書を刊行しております。

本報告書は平成27年度に発掘調査を実施した調査成果をまとめたものです。

この調査の結果、縄文時代の土坑、中世の堀跡や大溝跡などの遺構とともに縄文時代から中世の遺物が発見され、縄文時代から続く人々の営みがあったことが確認されました。

この調査成果が、埋蔵文化財の保護等に広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている青森県県土整備部道路課に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたりご指導・ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成29年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 田村博美

## 例 言

- 1 本書は、県道差波新井田線交通安全施設整備事業に伴い青森県埋蔵文化財調査センターが平成27年度（第4次調査）に発掘調査を実施した八戸市館平遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地及び青森県遺跡番号は以下のとおりである。  
館平遺跡（青森県遺跡番号203024） 青森県八戸市大字新井田字古戸沢外
- 3 遺跡の調査面積は以下のとおりである。  
2,200㎡
- 4 発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、調査を委託した県土整備部道路課が負担した。
- 5 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。  
発掘調査期間 平成27年8月4日～同年10月16日  
整理・報告書作成期間 平成28年4月1日～平成29年3月31日
- 6 本書は青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆は齋藤正文文化財保護主幹が行い、文末に執筆者名を記した。
- 7 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。  
遺構測量 株式会社知立造園  
遺物写真撮影 シルバーフォト、フォトショップいなみ
- 8 石器の石質鑑定は日本第四紀学会会員 山口義伸氏に依頼した。
- 9 発掘調査及び報告書作成における出土品・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 10 発掘調査及び本報告書の作成に際して、下記の機関・諸氏からご指導・ご協力を得た（五十音順・敬称略）。  
小保内裕之、榊原滋高、杉山陽亮、船場昌子、村木 淳
- 11 発掘調査成果の一部は、ホームページや発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がこれらに優先する。
- 12 本書に掲載した地形図（遺跡位置図）は、国土地理院発行の「数値地図25000（地図画像）」を複製・加工して使用した。
- 13 測量原点の座標値は、世界測地系（JGD2000）に基づく平面直角座標第X系による。
- 14 挿入中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。
- 15 全体図等の縮尺は、調査区は1/5,000及び1/2,500、遺構配置図は1/1,200及び1/800を使用し、挿入図毎にスケール等を示した。
- 16 遺構については、検出順にその種類を示す略号とこれまでの調査の通し番号を付した。遺構に使用した略号は、以下のとおりである。  
SD－溝跡、SK－土坑、SP－柱穴・ピット
- 17 遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付した。
- 18 遺構実測図の縮尺は、原則として土坑は1/60、堀跡・溝跡は1/100に統一し、挿入図毎にスケール等を示した。

- 19 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。
- 20 基本土層・遺構内堆積土層の色調表記等については、『新版土色帖2013年度版』（小山正忠・竹原秀雄）を使用した。
- 21 遺構実測図中で用いた網掛けの指示は挿図中に示した。
- 22 遺物については、層位ないしグリッド一括遺物を除き、取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺物に使用した略号は、次のとおりである。  
P—土器    S—礫・石器
- 23 遺物実測図には、挿図毎に1から通し番号を付した。
- 24 遺物実測図の縮尺は、原則として土器類は1/3、剥片石器は1/2、礫石器は1/3、土製品1/2、鉄製品は1/2に統一し、挿図毎にスケール等を示した。
- 25 遺物実測図に使用した網掛けの指示は挿図中に示した。
- 26 遺物観察表・計測表に使用した略号等については、表毎に指示内容を示した。土器計測値における底径の（ ）内の数値は推定復元値、器高の（ ）内の数値は現存値を示す。また、土製品・石器・鉄製品の計測値における（ ）内の数値は現存値を示す。
- 27 遺物写真には、遺物実測図と共通の番号を付した（例：図1-1は1-1と表記）。
- 28 遺物写真の縮尺は不同である。

# 目次

序  
例言  
目次

第1章 調査概要	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査・整理の方法	1
第3節 調査の経過	3
第2章 遺跡の環境	
第1節 遺跡の歴史的環境	9
第2節 遺跡の基本土層	10
第3章 検出遺構と出土遺物	
第1節 堀跡	11
第2節 溝跡	12
第3節 土坑	13
第4節 柱穴・ピット	15
第5節 遺構外出土遺物	16
第4章 総括	23
引用参考文献	24
写真図版	26
報告書抄録	33
奥付	

## 第1章 調査概要

### 第1節 調査に至る経過

平成18年に青森県県土整備部道路課から県道差波新井田線地方道路交付金事業の話があり、平成19年11月に青森県教育庁文化財保護課（以下「文化財保護課」）が現地踏査を行った結果、土師器片の散布を確認し、試掘調査を行うこととなった。

当該事業にかかる試掘調査は平成20年に市子林遺跡、平成21年に館平遺跡が実施され、その結果、それぞれ本調査が必要であると判断された。

用地買収の進捗状況から、発掘調査が可能な市子林遺跡と隣接する館平遺跡の一部を平成22年5月から7月に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施した（第1次調査 青森県教育委員会2012「市子林遺跡・館平遺跡」第516集）。

以後、度重なる現地協議等を経て、平成23年8月から10月までと平成25年8月から10月までの2度に渡り、平成22年度に行われた調査区の南側に延伸する未調査部分の発掘調査を実施した（第2・3次調査 青森県教育委員会2015「館平遺跡Ⅱ」第553集）。

平成26年6月に、再度、関係機関である三八県民局地域整備部道路施設課、文化財保護課、青森県埋蔵文化財調査センターにより残存する未調査部分の現地確認と次年度の発掘調査に向けた協議が行われた。

平成27年6月に未買収部分と上物等の撤去が完了したことを受け、三者による現地協議を経て、同年8月から10月までの期間で発掘調査を実施することとなった（第4次調査）。

事業者側から土木工事のための発掘に関する通知は、平成27年7月に提出され、これを受けて青森県教育委員会教育長名で当該発掘前における埋蔵文化財の記録の作成を目的とする発掘調査の実施が指示された。

（中嶋）

### 第2節 調査・整理の方法

#### （1）発掘調査

〔測量基準点・グリッド設定・水準点の設置〕

今回の調査は当センターが平成22年度から実施しているグリッド設定を踏襲した。グリッド原点の平面直角座標はX=54,200、Y=57,900である。1グリッドを4×4mとし、原点から北に向かってAA～AY、BA～BYの順（いずれもZは未使用）にアルファベットを組み合わせて、同じく原点から東に向かって1、2、3……の順に算用数字を付し、南西隅の杭を用いてAA-1やAY-99のように呼称した。測量に用いた標高原点は、調査区に打設したBMや、調査区外に存在する水準点から原点移動を行い、適宜設置した。

〔基本土層〕

表土から順にⅠ層・Ⅱ層とローマ数字を付し、細分層については連続するアルファベットの小文字を用いている。

〔表土等の調査〕

表土除去および排土移動には主に重機を使用し、人力を併用した。出土遺物はグリッド単位で層位毎に取り上げた。

[遺構の調査]

検出遺構には、原則として確認順に種類別の番号を付して精査した。堆積土観察用のセクションペルトは、遺構の形状・大きさに応じて基本的に2分割で設定した。遺構の堆積土層には算用数字を付し、ローマ数字を付けた基本土層と区別した。遺構実測と遺物の取り上げは、株式会社知立造園に委託し、トータルステーションによる測量点を株式会社CUBIC製「遺構実測支援システム」を用いて図画する方法を併用した。実測図は縮尺1/20を基本として作成し、遺構の規模や性格に応じて変更した。

[遺物包含層の調査]

遺物包含層は人力で掘削した。出土遺物は、原則としてグリッド単位で層位毎に取り上げた。

[写真撮影]

原則として35mmモノクローム・35mmカラーリバーサルの各フィルム及びデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状況、遺物の出土状況・精査状況・完掘後の全景等について記録した。

**(2) 整理・報告書作成作業**

堀跡1条、溝跡(SD)1条、土坑(SK)6基、柱穴・ピット(SP)63基を検出した。遺物は、縄文・平安時代の土器、中世の陶器、石器、鉄製品が段ボール6箱分出土した。

以上について、検出遺構の構築時期や変遷等に重点を置いて整理・報告書作成作業を進めた。

[図面類の整理]

遺構の平面図や堆積土層断面図はトータルステーションによる測量で作成したため、遺構毎に図面修正を行った。また、遺構台帳・遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

[写真類の整理]

35mmモノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、遺構や包含層からの遺物の出土状態、遺構の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付した。

[遺物の洗浄・注記と接合・復元]

遺物の洗浄を早期に終え、接合・復元作業を進めた。遺物の注記は、調査年度・遺跡名・遺構名・グリッド名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器等、直接注記できない遺物については、収納したチャック付きポリ袋に注記をした。

[掲載遺物の選別]

遺物全体の分類・検討を適切に行った上で所属時代・型式・器種等の分かる資料等を掲載遺物として抽出した。図化にあたっては選別資料を慎重に観察し、あわせて観察表・計測表等を作成した。写真撮影は業者に委託して行ったが、実測図等では表現しづらい質感・雰囲気・制作技法・文様表現等を伝えられるよう留意した。

[図面の浄書・編集・版下作成]

株式会社CUBIC製「遺構実測支援システム」、アドビシステムズ「Illustrator」・「Photoshop」・「InDesign」を適宜用いた。



## 〔遺構の検討・分類・整理〕

遺構毎に種類や特徴を整理し、構築時期や性格等について検討を加えた。

## 〔遺物の検討・分類・整理〕

時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・個体数等について検討した。

## 〔調査成果の検討〕

遺構・遺物の検討結果を踏まえて、遺跡の歴史的位置づけについて整理・検討した。

## 第3節 調査の経過

## (1) 発掘作業の経過

発掘調査事業は、平成27年8月4日から同年10月16日まで行った。発掘調査体制は以下のとおりである。

調査主体	青森県埋蔵文化財調査センター		
	所長	三上 盛一	(現青森県教育庁教育次長)
	次長(総務GM)	川上 彰雄	
	調査第一GM	中嶋 友文	
	文化財保護主幹	野村 信生	
	文化財保護主査	齋藤 正	(現文化財保護主幹)
専門的事項に関する指導・助言			
	調査員	藤沼 邦彦	前弘前大学教授(考古学)
	＃	福田 友之	青森県考古学会会長(現青森県史編さん考古部会長)(考古学)
	＃	松山 力	日本地質学会会員(地質学)

発掘作業の経過等は、以下のとおりである。

6月下旬 三八県民局地域整備部道路施設課・文化財保護課と調査前の打合せを行い、工事の優先箇所や発掘作業の進め方等について確認した。

7月下旬 調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等の事前準備を行った。

8月4日 調査機材を搬入し、調査を開始した。

8月中旬 表土掘削を行い、検出した遺構の精査を開始した。

10月16日 調査を終了し、現地から撤収した。

## (2) 整理・報告書作成作業の経過

平成27年度に実施した発掘調査に関する報告書刊行事業は、平成28年4月1日から平成29年3月31日まで行った。本遺跡は縄文時代・古代・中世に跨がる複合遺跡であるため、これに応じた作業工程を計画した。

整理主体	青森県埋蔵文化財調査センター		
	文化財保護主幹	野村 信生	

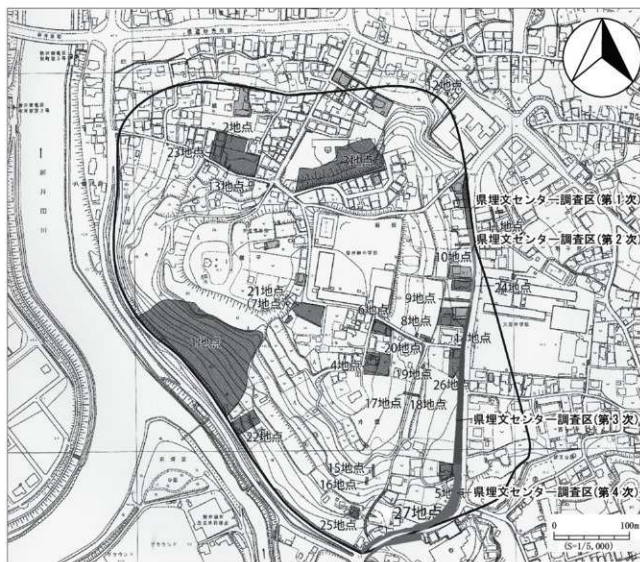


## 文化財保護主幹 齋藤 正

整理・報告書作成作業の経過等は、以下のとおりである。

- 4月 写真・図面類の整理および遺物の核合・復元作業を開始。  
 6月 報告書掲載遺物の検討・選別・図化を開始。  
 11月 各図面の浄書・割付・版下作成・報告書掲載遺物の写真撮影を開始。  
 1月下旬 業者の選定・版下入稿。  
 3月下旬 3回の校正を経て本書を刊行。記録類・出土品を整理・収納した。

(齋藤)



八戸市教育委員会 2014 を転載・加工  
 1～27 地点は八戸市教育委員会による調査地点

図2 調査地点

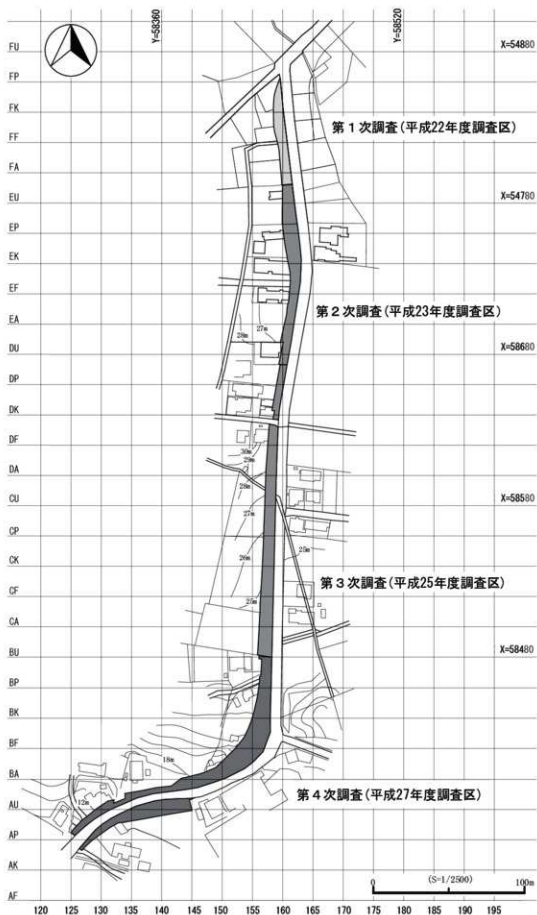


图3 調査区域图

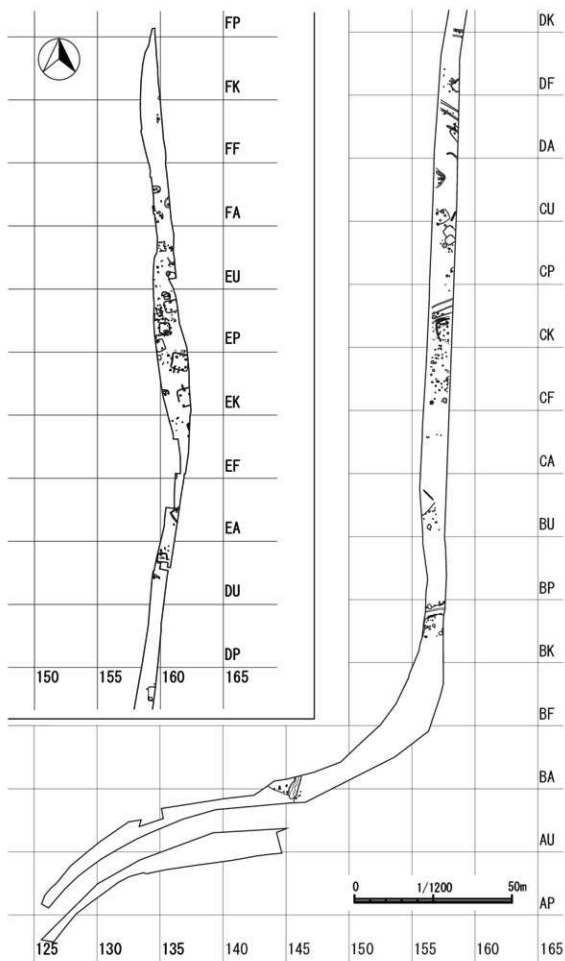


図4 遺構配置図(第1～4次調査)

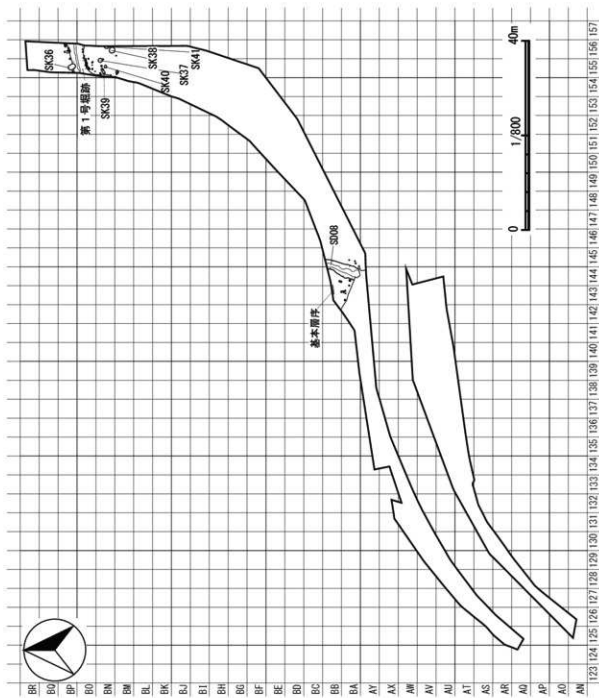


図5 平成27年度 遺構配置図

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の歴史的環境

#### (1) 周辺の遺跡について

館平遺跡は八戸市の南東部に位置し、八戸市庁から南東へ約4kmの地点に所在する。遺跡は新井田川と支流松館川の合流地点の右岸に形成された高館段丘上に立地し、標高は6～37mである(図1)。縄文時代早期～後期・飛鳥時代・平安時代・中世・近世の遺跡である。縄文時代早期中葉の標識土器である「白浜式土器」が出土した遺跡として知られ、遺跡中心部は根城南部氏の一族、新田氏の居城「新田城」が築かれた場所としても知られる。

新井田川下流域には数多くの遺跡が分布しており、標識資料が出土した遺跡や集落遺跡が存在する。赤御堂遺跡(23)は縄文時代早期・中期・後期、中世、近世の遺跡である。早期後葉の「赤御堂式土器」の標識遺跡として知られる。新井田古館遺跡(147)は縄文早期から中期、弥生、古代、中世、近世の遺跡である。新井田古館遺跡は新田城と密接な関係がある遺跡で「九間」を二つ並べる本格的な主屋や大型の倉庫等の建物跡が多数検出されている。市子林遺跡(39)は古墳、飛鳥、奈良、平安、中世、近世の遺跡である。調査の結果、古代の集落が営まれた後、中世には堀で区画され、その両側に掘立柱建物跡や竪穴建物跡等が存在したと想定されている。県道差波新井田線交通安全施設整備事業に伴う発掘調査において多数の近世墓坑が検出されている(青森県教育委員会2012)。これらの遺跡と本遺跡には、時期的な重なりがあり、相互の関わりが考慮される。※( )の数字は図1の番号と対応。

#### (2) 新田城について

調査において中世の遺構・遺物を確認している。これらは新田城に関連する可能性が高いので、新田城について述べることにする。

新田城の構造は明らかではないが、発掘調査や地表面観察、地籍図等で現在、八幡宮や児童館がある主曲輪とその東側、新井田小学校の校地となっている外館の2つの曲輪で構成されていたと言われる。堀跡は2つの曲輪の周辺と県道差波新井田線と大館中学校の間に大規模な外堀があったとされる(八戸市2009)。新田氏は根城南部家5代政長の次男政持を祖とする(『新田家伝記』)。また、「源氏南部八戸新田家系」の2代親光の項には「政光是ニ於イテ明德四年春甲州之領知ヲ捨テ奥州糠部郡八戸ニ下向ス、此時親光嫡家ニ從イ相俱ニ下向メ新田城ニ居ス」とある。いずれの記録からも南部氏の庶流となっているが、市村高男氏は建武5年(1338)5月の「浅利清連進状」には、建武3年(1336)の戦いに「比内郡凶徒新田彦次郎政持」との記載があることから元々、比内郡出身で婚姻関係を通じて南部氏に取り込まれ、新田に入り城を築城したとの見解をしている(市村2003)。新田城の築城年代は不明であるが、記録類からは明德4年(1393)頃と考えられる。

近世に天文年間の様子を編纂した「三翁昔話後編」一に根城南部氏の家臣団が記載されている。その中には「四天之御一家」として新田・中館・田中・沢里の4氏、「御親類」に岡前氏の名前が見える。また、元和7年(1621)の「八戸御支配帳」には家臣を八つの家格に区分していたが「一家」に新田・中館・岡前・沢里の各氏が記載されている。これらの記録から新田氏は、中世から根城南部氏の中で有力な庶流であったと認識されていたことがわかる。

中館・岡前・沢里の三氏については、沢里氏の名字の地である沢里（現八戸市大字沢里周辺）一円を支配していたこと以外は所領内に館を持たず、根城城内の「中館」「岡前館」「沢里館」を居所とした可能性がある。対して新田氏は根城城内に居所を持たず、新田城を居所とし、新田城下には横町・中町等の町場や対泉院があり、城下町を形成していた。馬淵川を天然の水濠とする根城と新井田川を天然の水濠とする新田城が東西を二分して守護する体制がとられていたと見られる（八戸市2015）。

寛永4年（1627）に根城南部氏八戸直義は盛岡藩南部利直から遠野への知行替えを命じられ、新田12代の新田義実も遠野へ移った。これにより、新田城は廃城したと考えられる。

## 第2節 遺跡の基本土層

遺跡の基本土層はBB-144グリッドの調査区際で確認した。I層からX層に分層した（図6）。

I層は黒褐色土を主体とした表土層である。II層は黒褐色土を主体に、十和田b浮石を含んでいる。色調等によりa・b層に細分した。III層は黒色土を主体に中搬浮石を含んでいる。IV層は黒褐色土を主体に径1～10mmの黄褐色の南部浮石と中搬浮石を含んでいる。V層は暗褐色土を主体に径1～30mmの黄褐色の南部浮石を含んでいる。VI層は暗褐色土を主体に南部浮石を含んでいる。南部浮石の混入量によりa・b層に細分した。VII層は褐色土を主体に、径10～20mmの浮石を含む。VIII層は黄褐色土層。IX層は黄褐色土を主体に砂径1～10mmの砂を含む。X層は黄褐色土の粘土層である。

なお、館平遺跡の地形・地質については既刊の報告書（青森県教育委員会2015）に記載されているので、本報告書では重ねて報告はしない。（齋藤）



図6 基本土層

## 第3章 検出遺構と出土遺物

今回の調査は平成25年度調査区の南側を対象としている。標高は約12～18mであり、南側の松館川へ下る緩やかな斜面となっている。検出された遺構は堀跡1条、溝跡1条、土坑6基、柱穴・ビット63基であった。出土遺物は段ボール箱6箱分出土している。



## 第1節 堀跡

## 第1号堀跡 (旧SD05) (図7)

[位置・確認] BM～BP-155、156グリッドに位置しており、V層で黒褐色土の広がりとして検出した。

[重複] 第36号土坑と重複し、本遺構が古い。

[規模] 開口部の幅は約3.8m、底面の幅は0.4mである。掘り込み面からの深さは約2.2mである。断面形状はV字状である。

[堆積土] 18層にした。層の下位には地山由来と思われるロームブロックが大量に混入しており、壁が崩落しながら堆積した状況を示している。

[出土遺物] 縄文土器、土師器、鉄製品が出土しているが、遺構外遺物として報告する。

[小結] 構築時期を示す遺物は出土していないが、中世の可能性が高いと考えられる。

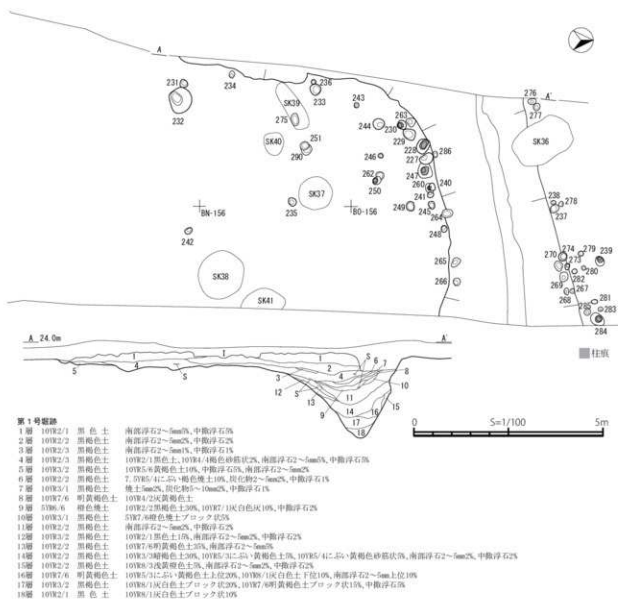


図7 第1号堀跡

第2節 溝跡 (SD)

第8号溝跡 (SD08 IBSD06) (図8)

[位置・確認] BA・BB-144、145グリッドに位置しており、V層で黒褐色土の広がりとして検出した。  
[重複]なし。

[形状・規模] 開口部の幅は約3.8m、底面の幅は約0.8mである。掘り込み面からの深さは約1.1mである。断面形状は逆台形である。

[堆積土] 黒褐色土を主体に南部浮石や中撒浮石、炭化物が混入している。

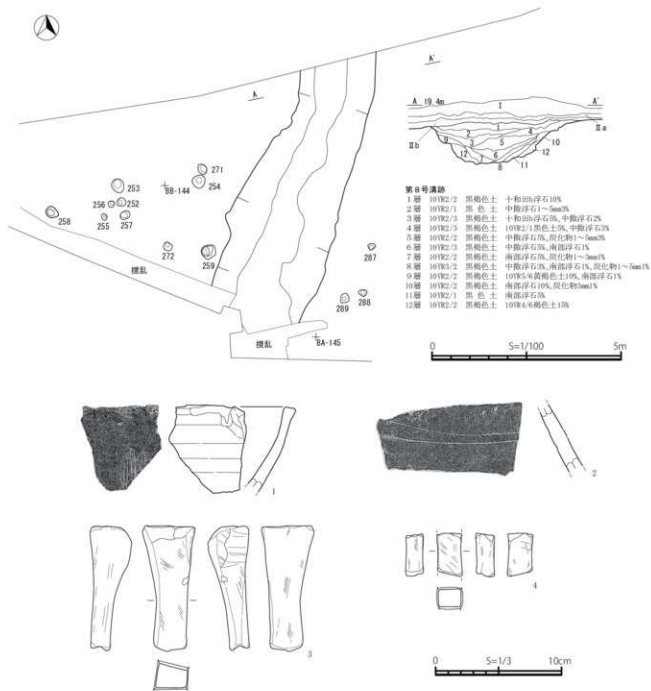


図8 第8号溝跡

[出土遺物]陶器、砥石、鉄製品が出土している。鉄製品は遺構外として報告する。1は珠洲の片口鉢の口縁部片でⅣ期と思われる。2は瓷器系陶器で壺・甕の胴部片である。3と4は砥石である。3は湾曲した楕形に変形している。2点共に4面の使用が観察できる。石質は細粒凝灰岩である。

[小結]出土遺物から中世の大溝跡と考えられる。

### 第3節 土坑 (SK)

#### 第36号土坑 (SK36) (図9)

[位置・確認]BP-155グリッドに位置しており、V層で黒褐色土の広がりとして検出した。

[重複]第1号堀跡と重複しており、本遺構が新しい。

[形状・規模]平面形状は不整な楕円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸163cm、短軸114cm、深さは37cmである。

[堆積土]黒褐色土に南部浮石や中振浮石、焼土が混入している。

[出土遺物]縄文土器と石器が出土した。1は平行沈線とLの縦回転が施文される。2は沈線と条痕が施文される。縄文時代後期前葉と考えられる。3は石織で先端部が欠失している。石質は珪質頁岩である。

[小結]重複関係から第1号堀跡より新しいが詳細は不明である。

#### 第37号土坑 (SK37) (図9)

[位置・確認]BN-155グリッドに位置しており、V層で黒褐色土の広がりとして検出した。

[重複]なし。

[形状・規模]平面形状は不整な円形であり、断面は平坦な底面から壁がやや内傾する形状である。検出面の規模は長軸91cm、短軸87cm、深さは49cmである。

[堆積土]黒褐色土を主体に南部浮石や中振浮石、炭化物が混入している。

[出土遺物]縄文土器と石器が出土している。4は口縁部片でLの横回転と沈線が施される。縄文時代後期前葉と考えられる。5は側縁に調整が見られる。

[小結]出土遺物から縄文時代後期前葉以降と思われるが詳細は不明である。

#### 第38号土坑 (SK38) (図9)

[位置・確認]BN-156グリッドに位置しており、V層で黒色土の広がりとして検出した。

[重複]なし。

[形状・規模]平面形状は不整な円形であり、断面は平坦な底面から壁がやや内傾する形状である。規模は長軸130cm、短軸87cm、深さは46cmである。

[堆積土]黒色土を主体に南部浮石や中振浮石、炭化物が混入している。

[出土遺物]縄文土器が出土している。6は口縁部片で隆帯が貼付けられる。7は深鉢の口縁部でミガキの後、RLの横回転と沈線が施文される。8は壺の把手部で赤色顔料が付着している。

[小結]断面形状からフラスコ状土坑の可能性が考えられるが、詳細は不明である。

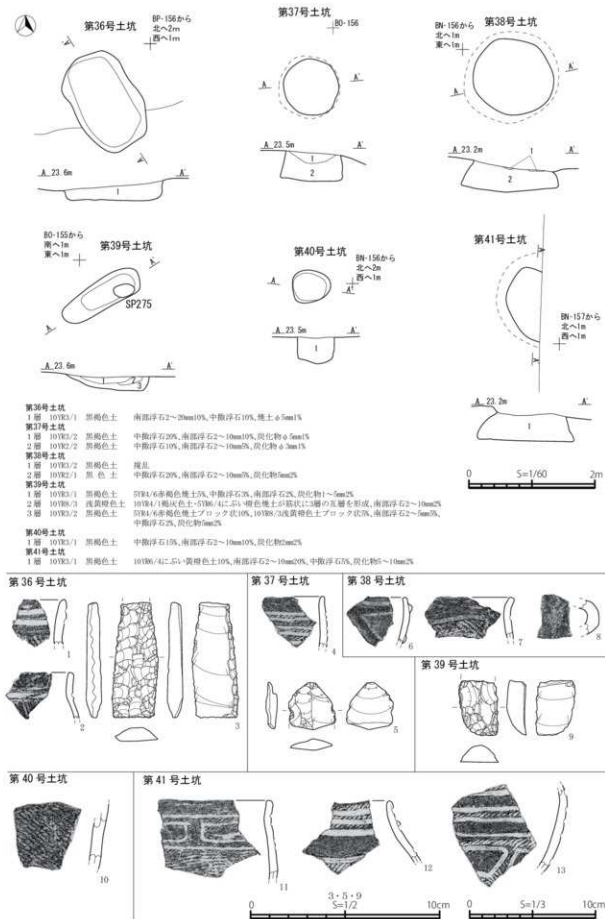


図9 土坑

**第39号土坑 (SK39) (図9)**

[位置・確認]BN-155グリッドに位置しており、V層で黒褐色土の広がりとして検出した。

[重複]SP275と重複しており、本遺構が古い。

[形状・規模]平面形状は楕円形であり、断面は平坦な底面から壁が外傾する形状である。検出面の規模は長軸138cm、短軸47cm、深さは29cmである。

[堆積土]黒褐色土や浅黄褐色土を主体に南部浮石や中振浮石、焼土、炭化物が混入している。

[出土遺物]縄文土器と石器が出土しているが、縄文土器は細片の為、掲載しなかった。9はスクレイパーである。

[小結]詳細は不明である。

**第40号土坑 (SK40) (図9)**

[位置・確認]BN-155グリッドに位置しており、V層で黒褐色土の広がりとして検出した。

[重複]なし。

[形状・規模]平面形状は不整な円形であり、断面は凹凸な底面から壁が垂直に立ちあがる形状である。検出面の規模は長軸62cm、短軸55cm、深さは43cmである。

[堆積土]黒褐色土を主体に南部浮石や中振浮石、炭化物が混入している。

[出土遺物]縄文土器が出土している。10は深鉢の胴部片でLの縦回転が施文される。

[小結]詳細は不明である。

**第41号土坑 (SK41) (図9)**

[位置・確認]BN-156グリッドに位置しており、V層で黒褐色土の広がりとして検出した。

[重複]なし。

[形状・規模]調査区外に延びていくため平面形状は不明であるが、不整な円形であると思われる。断面は平坦な底面から壁が内傾する形状である。深さは57cmである。

[堆積土]黒褐色土を主体に南部浮石や中振浮石、炭化物が混入している。

[出土遺物]縄文土器が出土している。11は深鉢の口縁部片でLの横回転、沈線が施される。12は鉢・壺の口縁部片でLの横回転、沈線が施文される。13は鉢・壺の胴部片でLの横回転、沈線が施文される。

[小結]断面形状からフラスコ状土坑の可能性が考えられるが、詳細は不明である。

**第4節 柱穴・ピット (SP)**

63基検出した。分布域がBA～BBグリッドとBM～BPグリッドの2カ所に認められる(図7・8)。

検出したピットの形状は円形を基調とする。計測値については一覧表にまとめた。出土遺物は縄文土器の細片がSP232～234・239・241・247・250・265・270・273・281から出土している。

BM～BPグリッドのピットは第1号堀跡の周辺に見られ、堀跡の上端に沿うようにあることから堀跡と関連する可能性が高い。(斎藤)

## 第5節 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は縄文土器、土製品、石器、土師器、鉄製品である。以下に種別毎に記述する。

### 1. 縄文土器 (図10・11-18)

出土した縄文土器は破片資料である。縄文時代早期・中期・後期の土器が出土しているが、時期別の割合は縄文時代後期が多い。

縄文時代早期の土器 (図10-1～3)

1～3はムシリⅠ式である。やや太めの沈線が施文される。

縄文時代中期の土器 (図10-4・5)

4・5は連続刺突と沈線が施文される。大木10式併行と思われる。

縄文時代後期の土器 (図10-6～図11-4)

6は鉢の口縁部である。幅の細い沈線で施文されている。7は深鉢の口縁部片で口唇部に刻目が施される。口縁部は沈線が施文される。9は幅の細い沈線で平行と格子目状に施文されている。12・13は胴部である。12は3本を一組とした沈線で施文されている。14～16は深鉢の口縁部、14は波状口縁で口唇部には刻目が施文される。17～19は胴部である。Rの単軸絡条体第5類が施文される。20・21はRの単軸絡条体第1類が施文されている。23～33は沈線間に地文縄文が施文される。無文帯はミガキが施される。34は深鉢の胴部で条痕と沈線が施される。35～39は条痕が施される。40・41は台付鉢の台部である。図11-1～3は壺の胴部と思われ、沈線が施文される。

縄文時代中期～後期の土器 (図11-5～18)

5～12は口縁部である。5は隆帯上にLR横回転が施文される。6・7はLR側面圧痕、LR縦回転が施文される。13・14は胴部、15～18は底部である。17・18は底面に網状痕が施文される。

### 2. 土製品 (図11-19～21)

円盤状土製品、鐔形土製品、ミニチュア土器が出土している。19は円盤状土製品で土器片の周縁を打ち欠いて整形している。20は鐔形土製品で沈線間に刺突が施文される。21はミニチュア土器で底面に沈線で施文されている。

### 3. 石器 (図12)

剥片石器は石鏃、石錐、スクレイパー類、礫石器は磨製石斧、磨り石、敲き石、台石が出土している。

1は有茎鏃の石鏃である。2は石錐である。両面調整で錐部を作り出している。3～5はスクレイパー類で3は両面、4・5は片面に調整がされる。剥片石器の石質は珪質頁岩である。

6～9は磨製石斧である。6・7は基部欠損、8・9は刃部欠損である。石質は6が閃緑岩、7が凝灰岩、8・9は安山岩である。10・11は磨り石で10は側縁に磨り面を持つ。石質は安山岩である。11は両面に磨り面と敲打痕が見られる。石質は凝灰岩である。12は敲き石である。側縁に敲打痕を持つ。石質は安山岩である。13は台石である。磨りの痕跡が見られる。石質は凝灰岩である。

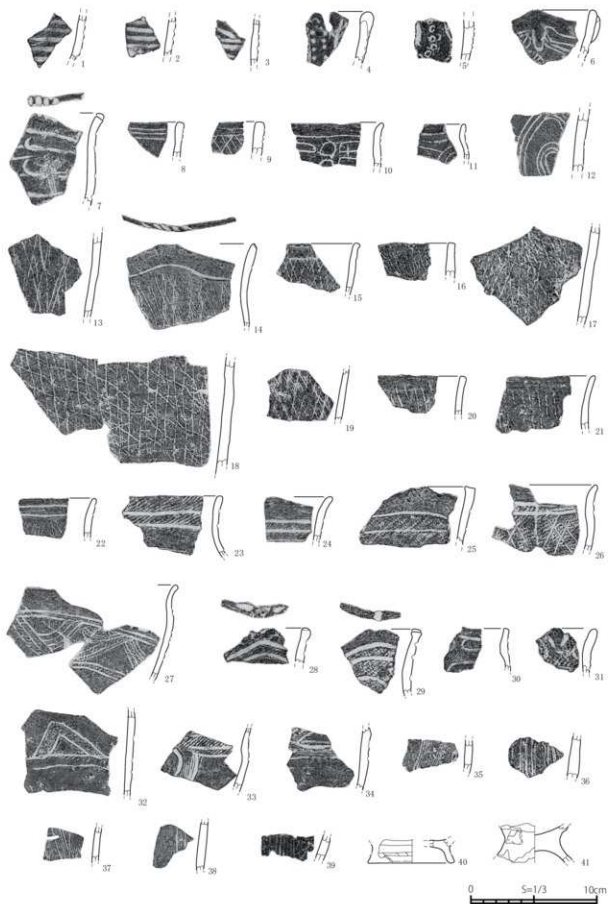


図10 遺構外出土遺物

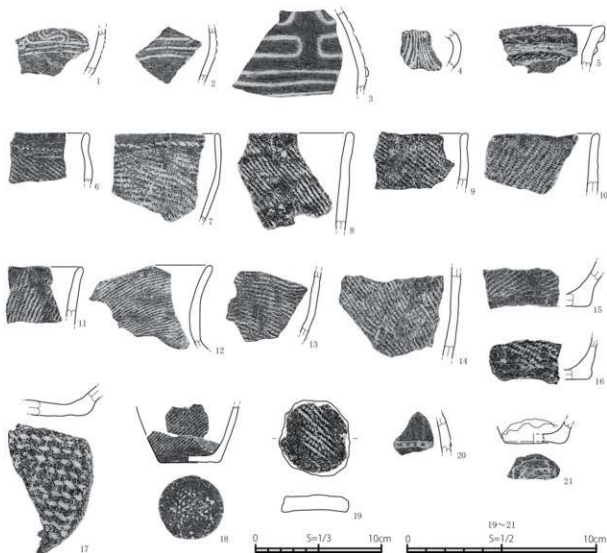


図11 遺構外出土遺物

#### 4. 土師器 (図13-1~7)

1は坏でロクロ成形である。底部には回転糸切りが見られる。2は高台坏で内面にミガキ・黒色処理がなされる。3~7は甕である。口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ、内面ヘラナデの調整がなされる。3~6は口縁部~胴部片、7は底部である。

#### 5. 鉄製品 (図13-8~15)

8~11は鉄鍔である。8は鍔身関部が不明瞭で刃部が先端に見られ、頭部は長い。9・10は鍔身が欠損している。頭部関の形状は台状である。11は長三角形の可能性がある。12は刀子で関部が「く」の字に屈曲している。13~15は板状の鉄製品である。13は折り返しらしいものが見られるので、鎌の可能性も考えられる。14・15は薄い板状に作り出しているが全体の形状は不明である。 (斎藤)





図12 遺構外出土遺物

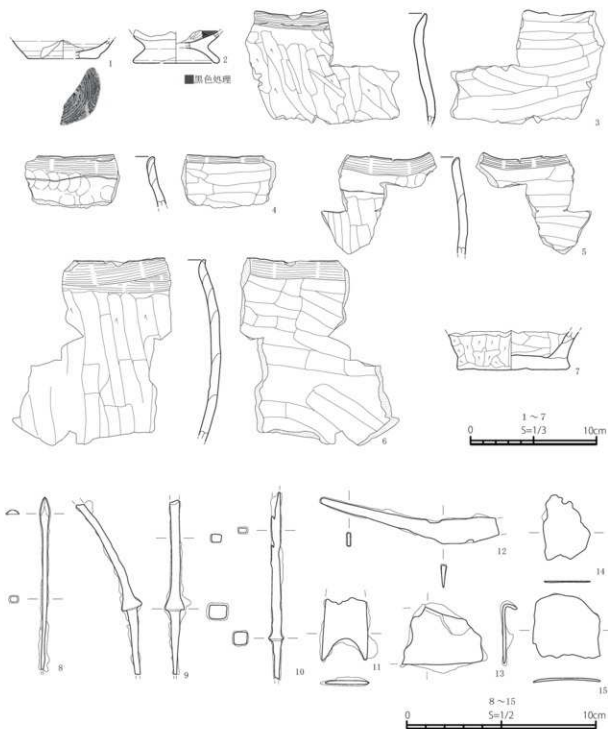


図13 遺構外出土遺物

柱穴・ピット計測表

遺構番号	国	位置	確認面	開口部規模	底面規模	柱穴規模 (cm)	深さ (cm)	重構	遺構番号	国	位置	確認面	開口部規模	底面規模 (cm)	柱穴規模 (cm)	深さ (cm)	重構
227	7	00-155	V	28×27	17×10		35	SP227/SP247	259	8	0A-144	V	41×29	16×10		23	
228	7	00-155	V	42×31	20×13	28×19	25		260	7	00-155	V	(25)×(18)	(6)×(6)	(13)×(12)	31	SP240-241/SP260
229	7	00-155	V	36×30	23×20		20		262	7	00-155	V	(22)×(19)	(14)×(11)			SP250/SP262
230	7	00-155	V	26×24	13×9	17×16	19		263	7	00-155	V	26×24	14×10		24	
231	7	00-155	V	22×23	14×13		13		264	7	00-156	V	30×23	21×13		23	
232	7	00-155	V	20×22	20×19	20×20	26		265	7	00-156	V	29×29	15×9		23	
233	7	00-155	V	30×28	22×18		20		266	7	00-156	V	31×19	13×10		18	
234	7	00-155	V	19×15	10×8		30		267	7	00-156	V	14×13	9×7		28	
235	7	00-155	V	23×21	13×11		12		268	7	00-156	V	19×11	9×6		24	
236	7	00-155	V	13×13	11×9		8		269	7	00-156	V	27×23	10×9		48	
237	7	00-156	V	23×21	18×16		28		270	7	00-156	V	28×22	17×12		35	
238	7	00-155	V	14×11	9×8		11		271	8	00-144	V	30×23	21×16		22	
239	7	00-156	V	27×22	10×8	20×16	44		272	8	0A-144	V	25×22	15×10	21		
240	7	00-155	V	21×17	(9)×(9)		29	SP240/SP260	273	7	00-156	V	19×13	10×8		34	
241	7	00-155	V	17×16	8×8		21	SP241/SP260	274	7	00-156	V	34×24	18×15		32	
242	7	00-156	V	21×15	10×9		27		275	7	00-155	V	34×21	24×13		15	SP275-SK39
243	7	00-155	V	14×13	8×5		10		276	7	00-155	V	22×16	10×8		13	
244	7	00-155	V	31×29	17×12		41		277	7	00-155	V	21×18	11×10	19		
245	7	00-156	V	21×17	13×13		15		278	7	00-155	V	16×10	8×5	12		
246	7	00-155	V	14×13	8×7		10		279	7	00-156	V	15×14	11×10	7		
247	7	00-155	V	(45)×(39)	13×10	25×20	41		280	7	00-156	V	13×12	9×8	5		
248	7	00-155	V	18×16	12×9		17		281	7	00-156	V	17×12	15×10	18		
249	7	00-155	V	26×23	20×16		14		282	7	00-156	V	15×14	12×11	4		
250	7	00-155	V	25×20	11×10	16×13	37	SP250/SP262	283	7	00-156	V	14×12	6×5	16		
251	7	00-155	V	24×23	17×15		31	SP251/SP290	284	7	00-156	V	41×29	14×12	19×19	27	
252	8	0A-144	V	24×23	13×10		24		285	7	00-156	V	18×17	9×9	9		
253	8	0A-143	V	38×33	23×19		38		286	7	00-155	V	18×12	10×10	15		
254	8	00-143	V	35×34	16×16		36		287	8	0A-145	V	20×18	11×11	14		
255	8	0A-143	V	17×15	8×7		28		288	8	0A-145	V	24×19	14×11	9		
256	8	0A-143	V	18×17	12×10		21		289	8	0A-145	V	27×23	11×10	21		
257	8	0A-143	V	27×23	19×16		22		290	7	00-155	V	(28)×(22)	(18)×(18)	29	SP251/SP290	
258	8	0A-143	V	35×29	20×16		33										

## 階層

階層番号	整理番号	出土地点	層位	器種	部位	型式・時期	外面調整(文様)	内面調整(文様)	備考
8-1	T2	第8号溝跡	層土下層	片口鉢	口縁部	珠洲 ロタロ		ロタロ、黒目	P-2
8-2	T1	第8号溝跡	層土下層	壺、甕	胴部	定形系陶器 沈線		ナデ	P-1

## 縄文土器

図録番号	整理番号	出土地点	層位	器種	部位	型式・時期	外面調整(文様)	内面調整(文様)	備考
9-1	J1	第30号土坑	1層	炭鉢	口縁部	十層内1式	沈線、1線	ミガキ	
9-2	J2	第30号土坑	1層	口縁部	口縁部	十層内1式	沈線、糸織	ミガキ	
9-4	J3	第37号土坑	層土	炭鉢、鉢	口縁部	十層内1式	1線→沈線→ミガキ	ミガキ	
9-6	J4	第38号土坑	層土	鉢	口縁部	十層内1式	隆帯	ミガキ	
9-7	J5	第38号土坑	層土	炭鉢	口縁部	十層内1式	凹線→沈線	ミガキ	
9-8	J6	第38号土坑	層土	壺	把手	十層内1式	ナデ	ナデ	赤色顔料付着
9-10	J7	第40号土坑	層土	炭鉢	胴部	十層内1式	1線	ナデ	
9-11	J9	第41号土坑	層土	炭鉢	口縁部	十層内1式	1線→沈線	ナデ	
9-12	J8	第41号土坑	層土	鉢、壺	口縁部	十層内1式	隆帯→1線→沈線	ミガキ	
9-13	369	第41号土坑	層土	鉢、壺	胴部	十層内1式	1線→沈線→ミガキ	ミガキ	
10-1	J10	第1号塚跡	層土上位	炭鉢	胴部	ムシロ1式	沈線	ナデ	
10-2	J11	第1号塚跡	層土	炭鉢	胴部	ムシロ1式	沈線	ナデ	
10-3	J12	第1号塚跡	層土	炭鉢	胴部	ムシロ1式	沈線	ナデ	
10-4	J13	第1号塚跡	層土	炭鉢	口縁部	大木10式併行	沈線、網文	ナデ	
10-5	J14	第1号塚跡	層土	炭鉢	胴部	大木10式併行	沈線、網文	ナデ	
10-6	J15	第1号塚跡	層土	鉢	口縁部	十層内1式	皮広口縁、隆帯、沈線	ナデ	
10-7	J20	第1号塚跡	層土下位	炭鉢	口縁部	十層内1式	皮広口縁、口唇部：黒目、沈線	ナデ	
10-8	J21	第1号塚跡	層土	炭鉢	口縁部	十層内1式		ナデ	
10-9	J17	第1号塚跡	層土	炭鉢	口縁部	十層内1式	沈線→格子目式沈線	ナデ	
10-10	J18	第1号塚跡	層土中位	炭鉢	口縁部	十層内1式	沈線	ミガキ	
10-11	J23	第1号塚跡	層土	鉢	口縁部	十層内1式	沈線	ミガキ	
10-12	J26	第1号塚跡	層土	炭鉢	胴部	十層内1式	沈線(二本一単位)	ミガキ	
10-13	J48	第1号塚跡	層土	炭鉢	胴部	十層内1式	ナデ	ナデ	
10-14	J27	第1号塚跡	層土	炭鉢	口縁部	十層内1式	皮広口縁、口唇部：黒目、沈線→車輪跡全体第5形態	ナデ	
10-15	J30	00-156	V層	炭鉢	口縁部	十層内1式	車輪跡全体第5形態	ナデ	
10-16	J34	第1号塚跡	層土上位	炭鉢	口縁部	十層内1式	車輪跡全体第5形態	ミガキ	
10-17	J35	第1号塚跡	層土	炭鉢	胴部	十層内1式	車輪跡全体第5形態	ミガキ	
10-18	J32	第1号塚跡	層土中位	炭鉢	胴部	十層内1式	車輪跡全体第5形態	ナデ	
10-19	J33	第1号塚跡	層土	炭鉢	胴部	十層内1式	車輪跡全体第5形態	ミガキ	
10-20	J31	第1号塚跡	層土	炭鉢	口縁部	十層内1式	車輪跡全体第5形態	ミガキ	
10-21	J28	第1号塚跡	層土	炭鉢	口縁部	十層内1式	車輪跡全体第5形態	ミガキ	
10-22	J29	第1号塚跡	層土	炭鉢	口縁部	十層内1式	沈線→車輪跡全体第5形態	ナデ	
10-23	J36	第1号塚跡	層土	炭鉢	口縁部	十層内1式	1線→沈線→ミガキ	ナデ	
10-24	J37	第1号塚跡	層土	炭鉢	口縁部	十層内1式	皮広口縁、1線→沈線	ミガキ	
10-25	J40	第1号塚跡	層土	炭鉢	口縁部	十層内1式	皮広口縁、口唇部：黒目、1線→沈線	ミガキ	
10-26	J43	第1号塚跡	層土中位	炭鉢	口縁部	十層内1式	1線→沈線→格子目式沈線	ミガキ	
10-27	J19	第1号塚跡	層土	鉢	口縁部	十層内1式	1線→沈線→ミガキ	ミガキ	
10-28	J38	第1号塚跡	層土	炭鉢	口縁部	十層内1式	皮広口縁、口唇部：黒目、1→沈線	ミガキ	
10-29	J39	第1号塚跡	層土	炭鉢	口縁部	十層内1式	皮広口縁、口唇部：黒目、1線→沈線	ミガキ	

## 縄文土器

図版番号	整理番号	出土地点	層位	器種	部位	型式・時期	外面調整(文様)	内面調整(文様)	備考
10-30	145	第1号塚跡	埋土	深鉢	口縁部	十徳内1式	波状口縁 8線一沈線		ナゲ
10-31	141	第1号塚跡	埋土	深鉢	口縁部	十徳内1式	波状口縁、刻目、13線一沈線		ニガキ
10-32	170	第1号塚跡	埋土	深鉢	胴部	十徳内1式	1線一沈線		ニガキ
10-33	146	第1号塚跡	埋土	鉢	口縁部	十徳内1式	1線一沈線		ナゲ
10-34	116	第1号塚跡	埋土	深鉢	胴部	十徳内1式	条痕一沈線→ニガキ		ニガキ
10-35	122	第1号塚跡	埋土	深鉢	胴部	十徳内1式	条痕		ナゲ
10-36	151	第1号塚跡	埋土	深鉢	胴部	十徳内1式	条痕		ナゲ
10-37	152	第1号塚跡	埋土	深鉢	胴部	十徳内1式	条痕		ナゲ
10-38	149	第1号塚跡	埋土	深鉢	胴部	十徳内1式	条痕		ナゲ
10-39	150	第1号塚跡	埋土	深鉢	胴部	十徳内1式	条痕		ナゲ
10-40	168	第1号塚跡	埋土	台付鉢	台部	十徳内1式	ニガキ→一沈線		ニガキ
10-41	167	第1号塚跡	埋土	台付鉢	台部	十徳内1式	ニガキ		ニガキ
11-1	125	第1号塚跡	埋土	鉢、卍	胴部	十徳内1式	沈線→ニガキ		ナゲ
11-2	147	第1号塚跡	埋土	卍、鉢	胴部	十徳内1式	8線一沈線		ニガキ
11-3	124	第1号塚跡	埋土	卍	胴部	十徳内1式	ニガキ→一沈線→条痕		ニガキ
11-4	166	第1号塚跡	埋土	卍	卍部	十徳内1式	条痕		ナゲ
11-5	144	第1号塚跡	埋土	深鉢	口縁部	縄文～後期	隆帯→1線横		ナゲ
11-6	158	第1号塚跡	埋土	深鉢	口縁部	縄文～後期	1線横圧痕、1線縦		ニガキ
11-7	154	第1号塚跡	埋土	深鉢	口縁部	縄文～後期	1線横圧痕、1線縦		ニガキ
11-8	155	第8号溝跡	埋土	深鉢	口縁部	縄文～後期	1線		ナゲ
11-9	156	第1号塚跡	埋土	深鉢	口縁部	縄文～後期	1線横		ナゲ
11-10	153	第8号溝跡	埋土下層	深鉢	口縁部	縄文～後期	1線		ニガキ
11-11	159	第1号塚跡	埋土	深鉢	口縁部	縄文～後期	1線		ナゲ
11-12	157	第1号塚跡	埋土	深鉢	口縁部	縄文～後期	波状口縁		ナゲ
11-13	161	第1号塚跡	埋土	深鉢	胴部	縄文～後期	1線		ニガキ
11-14	160	IB-155	V層	深鉢	胴部	縄文～後期	1線		ナゲ
11-15	163	第8号溝跡	埋土	深鉢	底部	縄文～後期	1線		ナゲ
11-16	164	第1号塚跡	埋土	深鉢	底部	縄文～後期	1線		ナゲ
11-17	162	埴土	深鉢	底部	縄文～後期	網代痕			ナゲ
11-18	165	第1号塚跡	埋土	深鉢	底部	縄文～後期	1線横、網代痕		ニガキ

## 土製品

図版番号	整理番号	出土地点	層位	器種	法量・調整
11-19	土1	第1号塚跡	埋土	円盤土製品	長さ40mm、幅35mm、厚さ9.5mm、1線縦、角縁打欠
11-20	土2	IB-156	V層	埴形土製品	沈線、角突
11-21	土3	第1号塚跡	埋土	ミニチュア土器	底径(20mm)、器高(13mm)、底面に沈線

## 石器

図版番号	整理番号	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	石質	備考
8-3	10	第8号溝跡	埋土	砥石	90	41	19	127.5	細粒砂状岩	4面使用
8-4	11	第8号溝跡	埋土	砥石	(34)	21	15	16.4	細粒砂状岩	4面使用
9-3	1	第36号土坑	1層	石鏝	61	25	8.0	13.6	珩質頁岩	先端部欠損
9-5	2	第37号土坑	埋土	スタレイバー	25	25	6.0	3.2	珩質頁岩	
9-9	3	第39号土坑	埋土	スタレイバー	29	21	10	6.4	珩質頁岩	
12-1	4	第1号塚跡	埋土	石鏝	30	12	4.0	1.0	珩質頁岩	
12-2	8	第1号塚跡	埋土	石鏝	55	23.5	11	10.3	珩質頁岩	
12-3	5	第1号塚跡	埋土	スタレイバー	54	60	14	36.6	珩質頁岩	
12-4	7	IB-144	IV層	スタレイバー	25	18.5	6.75	2.4	珩質頁岩	
12-5	6	IB-156	V層	スタレイバー	40	52	12	24.1	珩質頁岩	
12-6	14	IB-146	埋土	磨製石斧	(84)	62	39	288.3	閃長岩	基部欠損
12-7	3	第1号塚跡	埋土	磨製石斧	(106)	52	30	200.4	凝灰岩	基部欠損
12-8	2	第1号塚跡	埋土	磨製石斧	(117)	49	24	211.5	安山岩	片部欠損
12-9	1	第1号塚跡	埋土	磨製石斧	(112)	44	27	181.0	安山岩	片部欠損
12-10	6	第1号塚跡	埋土	磨り玉	(130)	65	38	591.4	安山岩	側面使用
12-11	5	第1号塚跡	埋土	磨り玉	(95)	72	40	588.6	凝灰岩	2面使用
12-12	9	第8号溝跡	埋土	磨き石	85	73	49	563.3	安山岩	
12-13	15	IB-145	1層	台石	(145)	123	70	1649.8	凝灰岩	基部有り

## 土師器

図版番号	整理番号	出土地点	層位	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	外面調整	内面調整	備考
13-1	IB	第1号塚跡	埋土	杯	-	(1.5)	(5.5)	コナナゲ		コナナゲ
13-2	IB	第1号塚跡	埋土	高台杯	-	(2.5)	(6.4)	コナナゲ		コナナゲ、藍色処理
13-3	IB	第1号塚跡	埋土	甕	-	-	-	コナナゲ、ケズリ		ヘラナゲ
13-4	IB	第1号塚跡	埋土中位	甕	-	-	-	コナナゲ、指間圧痕		コナナゲ、ヘラナゲ
13-5	IB	第1号塚跡	埋土	甕	-	-	-	コナナゲ、指間圧痕		コナナゲ、ヘラナゲ
13-6	IB	第1号塚跡	埋土	甕	-	-	-	コナナゲ、ケズリ		ヘラナゲ
13-7	IB	第1号塚跡	埋土下位	甕	-	(3.1)	8.5	ケズリ		ヘラナゲ

## 鉄製品

図版番号	整理番号	出土地点	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考
13-8	Fe8	第8号溝跡	埋土	鉄鏝	(92)	(3)	(3)	鉄製品-4
13-9	Fe2	第1号塚跡	埋土上位	鉄鏝	(97)	(8)	(7)	鉄製品-2
13-10	Fe1	第1号塚跡	埋土上位	鉄鏝	(91)	(10)	(8)	鉄製品-1
13-11	Fe4	第1号塚跡	埋土上位	鉄鏝	(33)	(24)	(2)	
13-12	Fe3	第1号塚跡	埋土上位	刀子	(94)	(14)	(2)	
13-13	Fe7-2	第8号溝跡	埋土	板状鉄製品	(42)	(32)	(2)	
13-14	Fe6	第8号溝跡	埋土	板状鉄製品	(25)	(34)	(1)	
13-15	Fe7-1	第8号溝跡	埋土	板状鉄製品	(34)	(34)	(1)	

## 第4章 総括

館平遺跡は新井田川と支流の松館川との合流点の右岸、標高6～37mの段丘に立地している。本遺跡は県道差波新井田線交通安全施設整備事業に伴い、平成22・23・25・27年度の4次にわたり発掘調査が実施された。これまでの4次にわたる調査の結果、縄文時代早期中葉～前期初頭・中期・後期初頭～前葉、飛鳥時代、平安時代、中・近世に至る遺構・遺物を検出した。検出された遺構は竪穴住居跡（竪穴建物跡を含む）30軒、土坑41基、溝状土坑2基、土器埋設遺構2基、焼土遺構14基、溝跡8条、堀跡1条、柱穴・ピット287基である。遺物は段ボール箱で59箱分出土した。

これまでの調査成果（516集・553集）を踏まえながら、時代ごとのまとめを行う。

**縄文時代** 竪穴住居跡、土坑、溝状土坑、土器埋設遺構、焼土遺構を検出した。竪穴住居跡は第1次調査において縄文時代早期中葉の竪穴住居跡2軒、縄文時代後期の竪穴住居跡1軒を検出した（第516集）。また、縄文時代早期の底部に逆茂木痕を持つ土坑と後期の溝状土坑が検出されており、居住域や狩猟場として利用されていたことがわかった。遺物は縄文時代早期中葉～前期初頭・中期初頭・中期中葉～後葉・後期初頭～前葉の土器、石器、土製品、石製品が出土している。

**弥生時代** 今回の報告分では遺構・遺物共に検出していないが、第3次調査において弥生時代後期末の赤穴式段階と思われる土器片が出土している（第553集）。

**飛鳥時代** 今回の報告分では遺構・遺物共に検出していないが、第3次調査において竪穴住居跡1軒を検出し、7世紀代と推定される土器器が出土している（第533集）。

**平安時代** 竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡を検出した。竪穴住居跡は第1～3次調査において26軒検出した。カマドの煙道は地下式で、主軸方向が北西から北に軸を持つものが多い。竪穴住居跡内の降下火山灰の堆積状況から十和田a火山灰降下以前の構築・廃絶（第9・11・15・23号）、十和田a火山灰降下以後の構築・白頭山－苫小牧火山灰降下以前の廃絶（第10・13・17・21・24・29号）に分けられ、火山灰を含まない竪穴住居跡については、十和田a火山灰降下以後の構築・白頭山－苫小牧火山灰降下以前の廃絶、あるいは白頭山－苫小牧火山灰降下以後の構築・廃絶と思われる。この状況から集落の年代は9世紀から10世紀中葉と考えられる。遺物は土師器・須恵器・陶器・金属器が出土している。須恵器は岩手県差波町の杉の上窯産や五所川原窯産の破片が出土している。陶器は常滑の甕の破片である。八戸市教育委員会による24地点の調査において、竪穴建物跡から12世紀と推定される大甕の破片が出土しており、平泉を本拠地とした奥州藤原氏との関連性が考えられる。

**中・近世** 堀跡、大溝跡、土坑、鍛冶関連遺構、柱穴などを検出した。今回の報告した堀跡、大溝跡は新田城に関連する可能性が高い。堀跡は新田城の大規模な外堀（八戸市2009）に隣接する地点からの検出で外堀の可能性も考えられる。第3次調査において検出した鍛冶関連遺構は鍛冶炉・土坑・掘立柱建物跡を溝跡で区画していると考えられる。具体的な年代を示す遺物が出土していないが、新田城内の一施設、もしくは近世の鍛冶場という想定がされている（第553集）。遺物は陶磁器（青磁、珠洲、瓷器系陶器、肥前磁器）が出土している。（斎藤）

引用参考文献

- 青森県2004『青森県史 資料編 中世1 南部氏関係資料』
- 青森県教育委員会2012『子市林遺跡・館平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第516集
- 青森県教育委員会2015『館平遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第553集
- 八戸市2009『新編八戸市史 考古資料編』
- 八戸市2014『新編八戸市史 中世資料編』
- 八戸市2015『新編八戸市史 通史編Ⅰ 原始・古代・中世』
- 八戸市教育委員会1992『八戸市内遺跡発掘調査報告書4』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第45集
- 八戸市教育委員会1997『八戸市内遺跡発掘調査報告書9』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第69集
- 八戸市教育委員会1998『館平遺跡』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第75集
- 八戸市教育委員会1999『館平遺跡』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第81集
- 八戸市教育委員会2000『八戸市内遺跡発掘調査報告書12』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第83集
- 八戸市教育委員会2001『八戸市内遺跡発掘調査報告書13』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第87集
- 八戸市教育委員会2003『八戸市内遺跡発掘調査報告書16』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第96集
- 八戸市教育委員会2004『館平遺跡』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第99集
- 八戸市教育委員会2004『八戸市内遺跡発掘調査報告書18』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第102集
- 八戸市教育委員会2007『八戸市内遺跡発掘調査報告書24』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第114集
- 八戸市教育委員会2010『八戸市内遺跡発掘調査報告書27』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第124集
- 八戸市教育委員会2010『館平遺跡第22地点』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第128集
- 八戸市教育委員会2013『八戸市内遺跡発掘調査報告書30』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第140集
- 八戸市教育委員会2014『八戸市内遺跡発掘調査報告書31』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第143集
- 八戸市教育委員会2014『館平遺跡第27地点・昭平遺跡第3地点』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第146集
- 市村高男2003「中世七戸から見た南部氏と糠部」『中世糠部の世界と南部氏』高志書院
- 船場昌子2014「根城と新田城・新井田古館遺跡 ―根城南部氏と新田氏―」『第2回南部学研究会―中世南部氏と北日本の中世城館―』青森県南部町 南部町教育委員会

# 写 真 图 版



第1号堀跡 完掘

東より



第1号堀跡 断面

東より





第8号溝跡 完掘

南より



第8号溝跡 断面

南より



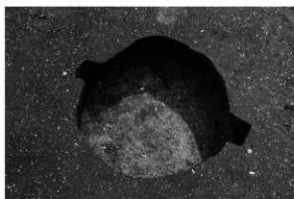
第36号土坑 完掘

北東より



第36号土坑 断面

北東より



第37号土坑 完掘

南東より



第37号土坑 断面

南より



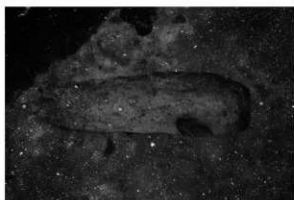
第38号土坑 完掘

西より



第38号土坑 断面

南より



第39号土坑 完掘

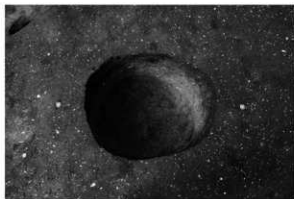
南東より



第39号土坑 断面

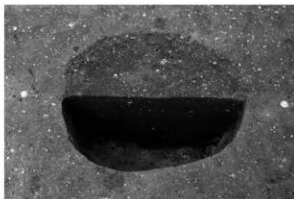
南東より

写真図版 3



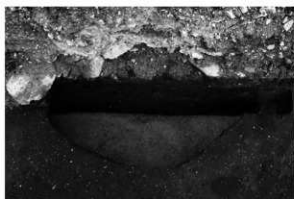
第40号土坑 完掘

南より



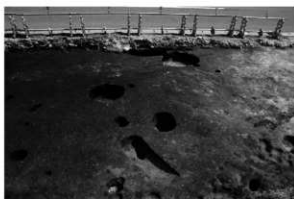
第40号土坑 断面

南より



第41号土坑 完掘・断面

西より



第37・38・39・40・41号土坑 完掘

西より



調査風景

西より



基本土層

南より



I No. 7+8, 8付近完掘状況

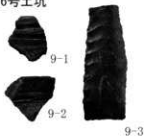
東より

写真図版 4

第 8 号溝跡



第36号土坑



第37号土坑



第38号土坑



第39号土坑



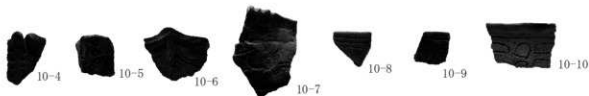
第40号土坑

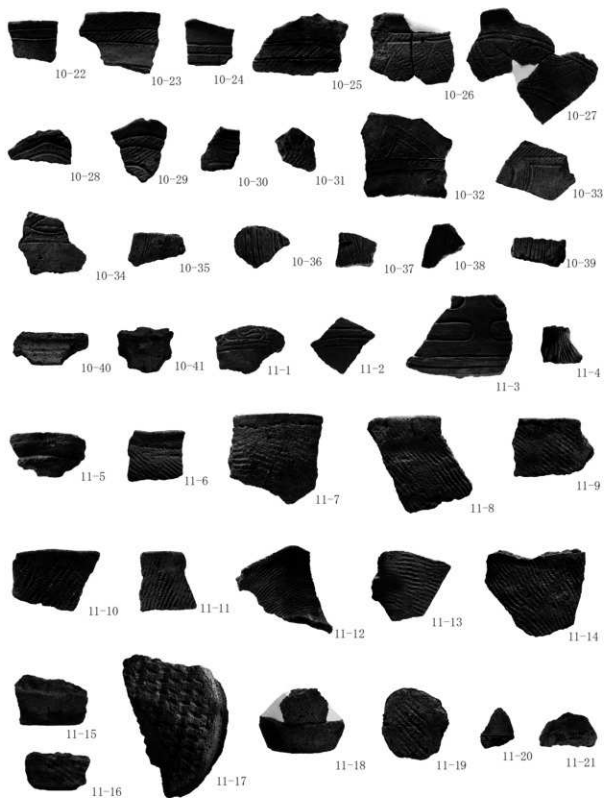


第41号土坑



遺構外







写真図版 7

## 報告書抄録

ふりがな	たてひらいせき さん							
書名	館平遺跡Ⅲ							
副書名	県道差波新井田線交通安全施設整備事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第582集							
編著者名	齋藤正							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森県青森市新城市天田内152-15 TEL 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	2017年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系 (JGD2000)		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
たてひらいせき 館平遺跡	あおもりけんほしらのへいし たいへいぶつ 青森県八戸市大字 にいだあひらきとむねが 新井田字古戸沢外	02203	203024	40° 29′ 17″	141° 31′ 20″	20150804 ～ 20151016	2,200	県道差波 新井田線 交通安全 施設整備 事業に伴 う記録保 存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
館平遺跡	集落	縄文	土坑	5	縄文土器・石器・土製品			
	散布地	古代			土師器・鉄製品			
	城館	中世	堀跡	1	珠洲・瓷器系陶器・砥石			
			溝跡	1				
			柱穴・ピット	63				
不詳	不明	土坑	1					
要約	<p>館平遺跡は新井田川と松館川の合流点、新井田川の右岸標高6～37mの河岸段丘に位置している。これまでも県道差波新井田線交通安全施設整備事業に伴う発掘調査が行われており、今回の調査が第4次の発掘調査となる。これまでの調査では縄文時代早期・後期、飛鳥時代、平安時代の集落跡や中・近世の掘立柱建物跡や鍛冶炉等の鍛冶関連施設が発見された。今回の調査では縄文時代、古代、中世の遺構・遺物を確認した。縄文時代については、縄文時代後期に属する遺構・遺物を検出し、過去の調査成果と照らし合わせて遺構・遺物の広がりを確認できた。中世については堀跡や大溝跡、陶器を検出した。これらは新田城に関連する可能性が非常に高いと思われる。</p>							

---

青森県埋蔵文化財調査報告書 第582集

## 館 平 遺 跡 III

— 県道差波新井田線交通安全施設整備事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

発行年月日 2017年(平成29年)3月24日  
発 行 者 青森県埋蔵文化財調査センター  
〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15  
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702  
印 刷 高金印刷株式会社  
〒038-0015 青森県青森市千刈2丁目1-31  
TEL 017-781-2244 FAX 017-781-2509

---